Kwansei Gakuin University

The tea culture found in the classics

— from the introduction of tea to the formation of tea ceremony —

Yasuhide Teramoto*

The aim of this paper is to trace back both to the introduction of the green tea into Japan and the birth of tea culture.

How was the green tea brought to our country, Japan? There are some opinions about this question. One of them is the view that the tea was introduced by the excellent priests who studied in China in the early Heian era and that in Kamakura era the tea had a close connection with Buddhism. The priests drank tea in order to be in high spirits during their religious mortifications. The priest Eisai described in his famous book "Kissa Youjouki" about the medicinal effects and the stimulant power of the tea.

Then only the privileged people could enjoy drinking tea during some five hundred years from its introduction. In Nambokucho era 'Tocha play', that is a kind of competition to guess what kind of tea the man is drinking, became popular. And the custom of drinking tea began to spread widely even among the common people.

From the middle of Muromachi era to the Sengoku era, Murata Juko and Takeno Joou established the base of tea ceremony and then in Azuchi Momoyama era, Senno Rikyu came out to complete the essence of what is called the spirit of tea ceremony of Japan herself.

Thus this paper describes plainly the history of tea culture by referring to thirteen pieces of historical sources.

* Assistant Professor, School of Economics, Kwansei Gakuin University

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

古典作品に見るお茶の文化史

―茶の伝来から茶道文化の成立まで―

関西学院大学経済学部　寺　本　益　英

はじめに

本稿の目的はお茶の伝来から茶道文化の成立までの歴史をふりかえることである。

まずはじめにお茶が日本にどのようにしてもたらされたか考察する。いくつかの説が唱えられているが、平安初期、中国に留学した高僧によって伝えられ、その後鎌倉時代に入ると仏教と結びつき、修行の際の精神高揚に利用されるようになった。栄西の『喫茶養生記』には茶の薬効や不眠覚醒作用が述べられている。

伝来から500年近くの間、お茶は一部の特権階級の人々に限られた飲み物であったが、南北朝時代には闘茶が流行し、庶民の間にも喫茶の風習が普及しはじめた。そして室町中期から戦国時代にかけては、村田珠光や武野紹鷗らが茶道の基礎を築き、安土桃山時代に至って千利休が日本独自の精神文化といわれる茶の湯を確立することになる。

以上のようなお茶の文化史について、13の史料を使いながら平易に述べてゆきたいと思う。

1．茶の伝来

お茶はいつ誰の手によって日本にもたらされたのだろうか。最も有力な説は、遣唐・入宋の僧が日本に持ち帰ったとするものである。周知のように7世紀から8世紀にかけて唐は国際色豊かな文化を発展させており、わが国からも大規模な遣唐使が派遣された。その遣唐使が伝えた文化の中に、喫茶の習俗が含まれていたとするのが定説である。

後述のように9世紀以降、勅撰の歴史書や漢詩集に茶の記載が見られるようになるが、さかのぼって、奈良時代の木簡にも「茶」と書かれたものがいくつか発見されている。したがって文書記録ではないが、奈良時代、貴族や東大寺の僧侶を中心に、すでに茶が飲用されていたと推察される。さらに近年桓武朝（781～806）の頃と考えられる遺跡（山城国府跡）から、緑釉陶器釜・火舎・椀が出土された。これらは当時の喫茶具である可能性が高い。

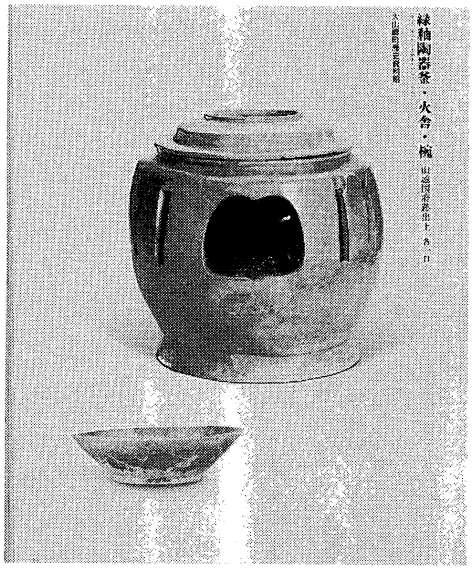

図1　緑釉陶器釜・火舎・椀（文献5）P.29

〈史料1〉『日本後記』にみる最初の茶

（弘仁六年四月）近江国滋賀韓崎に幸す。便ち崇福寺[1]を過る。大僧都永忠、護命法師等、衆僧を率い、門外に迎え奉る。皇帝輿より降り、堂に升りて仏を礼まう。更に梵釈寺[2]を過る。輿を停めて詩を賦す。皇太弟および群臣、和し奉るもの衆し。大僧都永忠、手ずから茶を煎じ奉御める。御被きを施す。即ち御船湖に泛べ、国司、風俗歌舞を奏す。五位已上ならびに掾[3]以下に衣被を賜る。史生以下郡司以上、綿を賜ること差あり。

〈解説〉

『日本後紀』は六国史[4]のひとつで、819（弘仁10）年に編集が開始され、840（承和7）年、藤原冬嗣・藤

本稿は2001年12月8日に行われた関西学院大学秋季オープンセミナー「日本古典文学の風景」において筆者が行った同一テーマの報告をもとに作成したものである。報告の機会をお授けくださった文学部・武久堅教授に心より御礼申し上げたい。また写真撮影にあたっては、総合教育研究室の深井純氏に格別のお世話になった。

さらに筆者の文化史研究をご支援くださり、本誌への掲載の便宜をはかってくださった総合教育研究室室長 杉原左右一教授、副室長の森田雅也教授、中川慎二助教授の各先生方にも深い謝意をささげたいと思う。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

原緒嗣ら７名の撰によって完成した。792年から833年までの史実が記録されている。この『日本後紀』における嵯峨天皇韓崎行幸の記事は、唐から帰朝した永忠が天皇に滋賀里の梵釈寺で茶を献じたと伝えている。

周知のように平安遷都から９世紀末頃まで、弘仁・貞観文化が繁栄した。その中心を担ったひとりが嵯峨天皇であり、中国唐文化から強い影響を受けていた。[5]喫茶趣味の導入も、この線上に位置づけることができるだろう。

ところで、この嵯峨天皇の行幸は815（弘仁６）年４月であり、入唐留学僧永忠が帰国してから10年の歳月が経っている。永忠の献じた茶は中国から持ち帰ったものか、日本でつくったものなのか明らかではない。ただ近江坂本の日吉大社には、日本最古の茶園があったという伝承があり、永忠が嵯峨天皇に献じた茶はここで作られたという説もある。日吉大社は伝教大師最澄（767～822）が延暦寺を創建したとき鎮守とした神社で、山王祭では古くから茶が献じられている。またこのとき献じられたのは団茶であった。団茶は茶の新芽を蒸気で蒸して、臼で搗いて団子状に丸めて乾燥したものである。

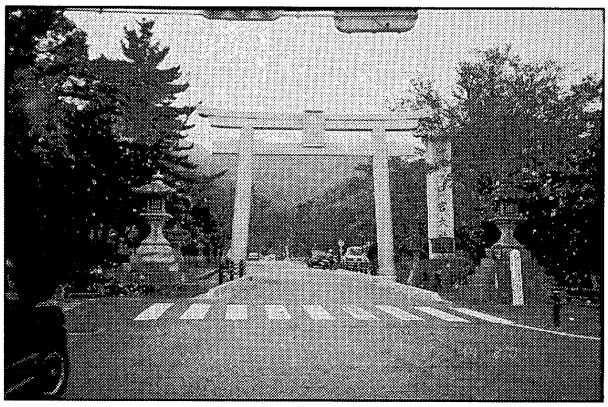

図２　日吉神社

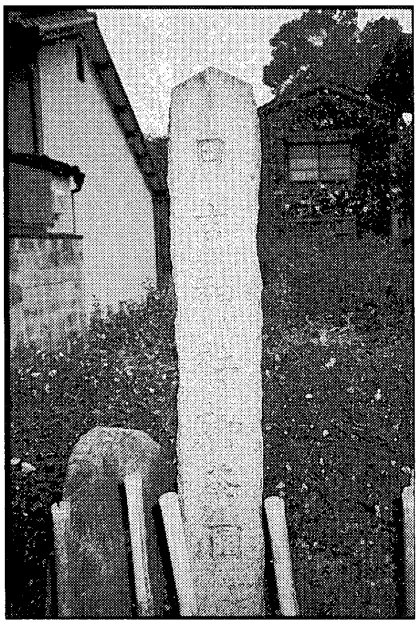

図３　日吉神社茶園

ともかく９世紀はじめ、茶は一部の貴族や僧侶の間である程度定着していたと考えて間違いなさそうである。

（注）

1）崇福寺は天智天皇（626～671）の発願によって建立されたといわれている。現在の滋賀県大津市に跡地がある。
2）梵釈寺は滋賀県蒲生郡蒲生町にある。現在は黄檗宗の寺院となっている。
3）国司は守・介・掾・主典の四等官からなる。
4）六国史は８世紀10世紀はじめにかけて勅撰された６つの正史（『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』）をいう。漢文・編年体を特徴とする。
5）嵯峨天皇は空海、橘逸勢とともに三筆として知られ、唐風の書道（唐様）の名手であった。

〈史料２〉漢詩『凌雲集』に見る王朝貴族の茶宴

暑を避け時に来たりて院裏[1]を問えば、池亭には一把の釣魚の竿、廻堤の柳翠夕陽暗く、曲岸の松声炎節寒し。[2]詩を吟じ、香茗[3]を搗くを厭わず。興に乗じて偏に宜しく雅弾[4]を聴くべし。暫し清泉に対し煩慮を滌い、況んや寂寞の日に歓をなすをや。

〈解説〉

『凌雲集』は814（弘仁５）年成立した最初の勅撰漢詩文集。嵯峨天皇の命で、小野岑守、菅原清公らが編纂したものである。

さて上記の引用は、嵯峨天皇自らの作品で、藤原冬嗣の別荘で開かれた喫茶の宴の情景を詠んだものである。詩を吟じ、気が乗れば風雅な琴の音を聞くのが何よりであり、そうしていると煩わしいことはすべて洗い流すことができると詠っている。

814（弘仁５）年成立の『凌雲集』に茶の記載があるということから、永忠ら留学僧が帰国し、比較的短期のうちに唐式の喫茶の風習が広がったと考えられる。喫茶の広がりは国の安定を意味し、その担い手は、天皇と天皇をとりまく文人・貴族たちであった。

なお818（弘仁９）年成立した第二勅撰漢詩集『文華秀麗集』（嵯峨天皇の命で、藤原冬嗣、菅原清公らが編集）においても、藤原冬嗣の別荘で行われた同じ茶会の情景が淳和天皇によって詠まれている。

（注）

1）院裏とは、藤原冬嗣の別荘を指す。
2）風になびく松が寂しげだということ。
3）もちろん茶のことであるが、ここでは前述の団茶を意味する。
4）風雅な琴の音。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

〈史料３〉漢詩『経国集』に見る「山中の茗」

出雲巨太守の茶歌に和す一首　惟氏

山中の茗、早春の枝。萌芽を採擷して茶となすの時、山傍の老は愛でて宝となし、独り金鑪[1]に対いて炙りて燥かしむ。空林[2]の下、清流の水。紗巾[3]にて漉す、すなわち銀の鎗子[4]。獣灰[5]は須臾[6]にして炎気盛んなり。盆に浮かび沸く浪の花。鞏県[7]の垸[8]を商家の盤に起こし、呉の塩を味に和さば、味更に美し。物性の由来は是れ幽潔[9]にして、深巌石髓[10]も此に勝らず。煎じ罷むも余香は処々に薫る。之を飲みて事無く白雲に臥さば、まさに知るべし、仙気、日に氛氳[11]たるを。

〈解説〉

『経国集』は淳和天皇の勅を奉じて良峯安世らが撰した勅撰漢詩文集で、827（天長４）年に成立した。惟氏は嵯峨天皇の宮女という説があるが、詳細はわかっていない。山で茶を摘み、清水をくんで湯を沸かして飲むまでの様子を詠ったものである。ただこの歌は現実の世界ではなく、唐代の文人たちが愛好した風雅な喫茶への憧れを表わすものといえる。

（注）

1）金鑪は通常金の香炉を意味するが、ここでの「炉」は火鉢と解釈した方がよい。
2）人気のない林の意。
3）薄絹の頭巾。
4）「鎗」は三本足があるなべのことである。
5）獣骨を焼いて灰にしたもの。
6）しばらく、暫時の意。
7）鞏県は現在の中国河南省にある地名。
8）垸は茶碗の意。
9）静かで清らかなこと。
10）石髓は鍾乳石のこと。仙人がよく服するといわれている。
11）気が盛んな様子をいう。

〈史料４〉『蔵人式』にみる宮中行事「季御読経」の引茶

天喜四年（1056）三ヶ日毎夕座、侍臣煎茶ヲ衆僧ニ施ス、又甘葛、煎薬、厚朴、生姜ナド随時加エル。

〈解説〉

「季御読経」とは、多数の僧を宮中に招き、天下泰平を祈る行事である。和銅年中(708～714・奈良時代初期)または天平元年(729・聖武天皇の時代)に始まり、鎌倉時代に終わったといわれている。

上の記録から推察できるように11世紀半ば頃の茶は、熱湯に茶の粉末を入れ、これに諸種の薬味を投じて飲用されていたようである。ただ、季御読経に使われた茶が日本産のものか、遣唐使などによってもたらされたものかは明らかではない。

２．鎌倉仏教と茶

前節で紹介したように中国から日本へ伝わった喫茶の風習は、９世紀後半以降あまり広がらなかった。その一因は当時の団茶は臭いが強く、日本人の嗜好に合わない点にあったと思われる。894（寛平６）年、菅原道真の建議によって遣唐使が廃止された。唐は８世紀の内乱（安史の乱）で衰退しており、多くの危険を冒してまで交渉を続ける必要がなくなったためである。菅原道真や都良香（834～79）らの詩文の中には茶に対する積極的姿勢が見られず、関心は酒へと向かうようになった。

10世紀に入ると文化の国風化が進んだ。大陸の影響が小さくなり、従来の文化を基礎に、日本の風土や人情・嗜好にかなった高度の貴族文化が誕生する。団茶の法は僧院の法会の中に、わずかに形骸化して残るのみであった。

一方中国は宋（960～1127）へと時代が移っていく。日本からもその文化を学ぼうと留学僧たちが送り込まれた。その中の一人に臨済宗の開祖である栄西がいた。宋の時代に入ると、中国の喫茶法は団茶法から抹茶法に変わっており、栄西は２回目の入宋のとき、この方式をわが国に伝えたのである。抹茶法は、石臼で粉末にした茶（抹茶）を茶碗に入れ、これに湯を注いで茶筅で撹拌する方法で、我々にもなじみ深いものである。その後禅僧たちの間では、修行中に襲ってくる睡魔を除くため、抹茶を飲む風習が定着していった。

図４　明庵栄西像（文献５）P.56

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

〈史料５〉薬用としての茶（『喫茶養生記』）

茶は末代の養生の仙薬にして、人倫延齢の妙術なり。山谷これを生ずれば、其の地神霊なり。人倫これを採れば、其の人長命なり。天竺・唐土、同じく之を貴重す。我が朝日本、昔之を嗜愛す。昔より以来、自国・他国、俱に之を尚ぶ。今更に捐つべきか。況んや末世[1]の養生の良薬なり。斟酌せざるべからざるや。謂わく刼初[2]の時、人の四大（地は肉・骨。水は血。火は煖気。風は動作力）は堅固にして、諸天の身と同じき。末世の時の人、骨肉は怯弱にして、朽木の如し。針・灸並びに痛し、湯治もまた応ぜざるか。若し其の治方を好まば、漸く弱く、漸く竭きん。怕れざるべからざる者か。

伏して惟わば、天、万像を造るに、人を造るを以て貴しとなすなり。人、一期を保つ、命を守るを以て賢となすなり。其れ一期を保つの根源は養生に在り。其れ養生の術計を示さば、五蔵（五臓）（肝・肺・心・脾・腎なり）を安んずべし。五蔵（五臓）の中、心蔵（心臓）を王とせんか。心蔵（心臓）を建立するの方は、茶を喫する、是妙術なり。その心蔵（心臓）を忘るれば、則ち五蔵（五臓）力をなくするなり。五蔵（五臓）を忘るれば、則ち身命に危うきこと在るか。寔に印土の耆婆[3]、往いて二千余年を隔つ。末世の血脈[4]を誰か問わんや。漢家の神農[5]隠れて三千余歳を送る。近代の薬味[6]、なんぞ理せんや。然れば則ち、病相を詢うに人無く、徒らに患い、徒らに死せるなり。治方を請うにも誤り有り。空しく灸し、空しく損なうなり。倫かに聞く、今世の医術は則ち薬を含みて心地を損ず。病と薬と乖くが故なり。灸を帯して身命を夭す。脈は灸と戦うが故なりと。大国之風を訪ねて近代の治方を示すに如かずか。仍て二門[7]を立て、末世の病相を示し、後昆[8]に留め贈り、共に群生を利せん。

時に承元五年辛未歳（1211）正月一日、謹んで叙す。

〈解説〉

栄西（1141～1215）は日本に茶生産を広めるため、またその薬効を知らせるために、1211（承元５）年、『喫茶養生記』を著わした。この書物は上下二巻からなり、茶の薬効から栽培適地、製法まで、細かく記されている。また、『喫茶養生記』には初治本と再治本があり、再治本は、この３年後の1214（建保２）年１月に書写し終わり、その翌年７月、寿福寺にて没した。

次に栄西の生涯を簡単にみておこう。栄西は鎌倉時代の禅僧で、臨済宗の開祖であることはあらためて述べるまでもない。1141（永治元）年４月、備中（岡山県）吉備津宮神主賀陽氏に生まれた。幼少のころから抜きんでた英才と伝えられており、11歳で安養寺の静心に学び、13歳で比叡山に登り、翌年落髪。その後もとの安養寺で修行したが、19歳のとき、再び比叡山で台密（天台宗に伝えられた密教）を学んだ。

栄西は仏教の源である宋へ渡り、大陸の正法を学んでわが国仏教の誤りを正したいという強い願いを持っていた。時代は保元・平治の乱が勃発し、混沌としていた上に、遣唐使などの大陸渡航が絶えて300年の月日が経ち、渡海は決死の覚悟と資財を要する一大事であった。

しかし栄西の意志は変わらず、1168（仁安３）年４月、27歳のとき、播磨の唯雅を伴い博多を出発し、無事寧波に到着した。あこがれの地で天台山万年寺、阿育王山に詣で禅宗への理解を深め、同年９月、天台の経巻60巻を携えて帰朝した。帰国後は、その経巻を天台座主明雲に呈し、故郷備中・備前を中心に伝法につとめたといわれている。

帰国後栄西はインドへ渡り釈迦八塔を礼拝したいという願いを抱くようになり、1187（文治３）年再度宋に渡航した。しかしインド行きは治安が悪いため、やむなく断念することになる。その後日本にもどるために乗船したところ、逆風で浙江省瑞安に上陸、それを機会に天台山万年寺で虚庵懐敞に出会い、師として学んだ。さらに天童山景徳禅寺で臨済禅を学び、４年後の1191（建久２）年宋人の船に便乗して肥前平戸に帰着した。このとき茶種を持ち帰ったという説があるが、時期が太陽暦では８、９月頃だと推定されている。茶種は寿命が短く、夏を越すと70～80％は発芽力を失うことを考えると、栄西が持ち帰ったのは茶の若木であったのかもしれない。育種面からは、根に土をつけてくるんでおけば数ヶ月は維持できるのである。ともあれ栄西は茶種（または若木）を肥前と筑前の境界の背振山に捲いた（植えた）。栄西は茶の栽培にはどのような土地が適しているかなど、様々な知識を持っていたと思われる。また栄西は布教とともに茶の栽培を積極的に行った。４年にわたる中国での生活で茶の養生延齢の効力を認め、また不眠覚醒作用が禅の修行に必要であると考えたからであった。

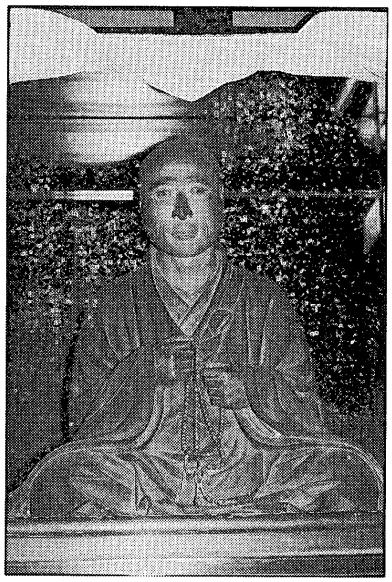

図５　明恵像

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

帰国した栄西は臨済禅を普及させようとするが、比叡山を中心とする旧仏教から妨害を受ける。しかし栄西は禅の教えは国を守っていくものであるとする『興禅護国論』を著わし、鎌倉に下り二代将軍頼家の帰依と庇護を受け、1205（元久２）年、京都に最初の禅寺建仁寺を完成し、禅宗を広めるための基礎を築いた。その２年後、明恵上人（1173～1232）が京都栂尾に華厳宗[9]の興隆を願って高山寺を中興し、たびたび栄西を訪れ問答をしていたといわれている。栄西は明恵に茶の薬効を話し、喫茶をすすめ、茶の実を栂尾に送ったのであろう。この際の容器（漢柿蒂茶入）が今も高山寺に残っている。

図６　漢柿蒂茶入（文献５）P.62

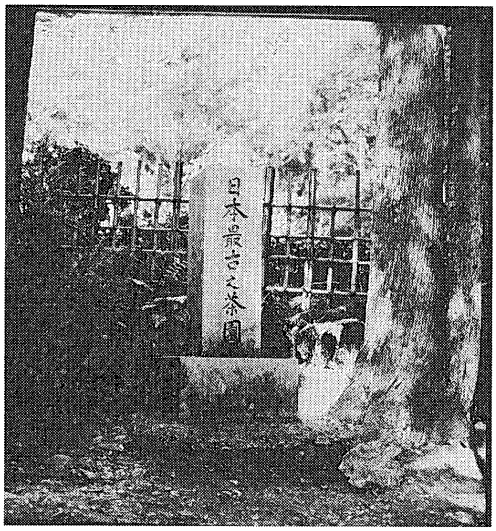

図７　高山寺日本最古の茶園

京都の栂尾における茶栽培はその後２世紀にわたって発展し、栂尾茶を「本茶」、それ以外のものを「非茶」と称するほど良質の茶が生産された。川霧が深いことなど、地理的・気象的条件が整っていたからである。

明恵は宇治へも茶を普及させ、量産化がはかられるようになった。現在黄檗山万福寺の門前にある「駒蹄影園跡」の石碑には、「栂山の　尾上の茶の木　分け植えて　あとぞ生ふべし　駒の足影」と刻まれているが、これは明恵が宇治の農民に茶種の播き方を教えたとき、馬の蹄の跡へ播くのがよいと指導したエピソードを伝えるものである。

（注）

1）末法の世のこと。仏教の予言思想で、釈迦入滅後千年を正法、次の千年を像法、その後１万年が末法とされる。末法は乱世といわれ、日本では1052（永承７）年より始まると考えられ、阿弥陀浄土への往生を願う浄土教の発達を促した。
2）この世のはじめの意。
3）耆婆は釈迦時代の名医。
4）血脈は仏教の伝統を師から弟子へ授け伝えること。
5）神農は中国の医祖といわれている。
6）薬味は薬の処方のこと。
7）二門とは、五蔵和合門（茶経）と遣除鬼魅門（桑経）をいう。前者は生理学的立論、後者は病理学的立論である。
8）後世の人。
9）いわゆる南都六宗（三論宗・成実宗・法相宗・倶舎宗・華厳宗・律宗）のひとつで、華厳経を典拠とする。東大寺が中心であった。なお明恵は『摧邪輪』を著わして法然の『選択本願念仏集』に反論し、華厳宗の興隆に力を尽くしたのである。

〈史料６〉将軍源実朝と茶（『吾妻鏡』）

（建保二年二月四日）晴。将軍家、いささか御病悩たり。諸人奔走す。但し殊には御事無し。是れ若しや去ぬる夜の御淵酔の余気か。ここに葉上僧正[1]、御加持に候するの処、此の事を聞きて、良薬と称し、本寺[2]より茶一盞を召し進る。而して一巻の書[3]を相副え之を献ぜしむ。茶徳を誉める所の書也。将軍家、御感悦に及ぶと云々。

〈解説〉

鎌倉時代の記録書として有名な『吾妻鏡』に、３代将軍実朝が二日酔いの際、栄西禅師から茶とともに『喫茶養生記』が献じられた。当時病気の治療法といえば、高僧による祈祷が最も効果的だと考えられていたが、栄西は良薬と称して茶をすすめたのである。カフェインによる覚醒作用で、実朝の気分もすっきりしたと思われる。この史料は上流階級の間で茶がもてはやされていたことを裏付けるものである。

（注）

1）栄西を指す。
2）寿福寺を指す。寿福寺は1200（正治２）年、北条政子が創建、開山は栄西である。鎌倉五山第３位の寺院。
3）『喫茶養生記』を指すと思われる。

〈史料７〉叡尊の儲茶（『関東往還記』）

今夕、駿河国前島宿に着く。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

廿二日。同国岡辺宿において中食。微雨降ると雖も宇津山を越ゆ。同国麻利子宿において儲茶。同国手越宿に着く。今夜、太子講を行ず。

〈解説〉

『関東往還記』は1262（弘長２）年２月、西大寺を中心に戒律の復興と民衆化に尽力した叡尊（1201～90）が、北条時頼[1](1227～63)、北条（金沢）実時[2](1224～76)の招きにより鎌倉に赴いたときの記録で、西大寺勢力の関東進出を伺うことができる。この頃新仏教[3]が武士や庶民に普及しつつあったが、この動きに刺激を受けた旧仏教[4]も、明恵や叡尊の手で復興に乗り出したのであった。

さてこの記録の中に何度か出るのが「儲茶」である。従来の研究では「儲茶」=「施茶」で、叡尊が道中人々に茶を施し、同時に授戒も行ったと考えられてきた。ところが最近の研究で、詳細な旅程の計算が行われ、「施茶」には時間不足であることが明らかになった。それならば「儲茶」とは、長旅をする叡尊の栄養補給（薬用）の役割を果たしたものと理解するのが妥当である。

史料とは関係ないが、1239（延応元）年より現在に至るまで西大寺に伝承されている大茶盛は、叡尊が年初の修正会の結願のお礼参りに鎮守八幡宮に茶を献じ、その後衆僧や参拝者に施茶したのが始まりであるとされている。

（注）

1）鎌倉幕府５代執権。1247年、宝治合戦で三浦泰村一族を滅ぼし、北条氏の地位を不動にしたことや、1249年、評定衆の補佐として御家人たちの所領に関する訴訟を担当する引付衆を任命したことはよく知られている。
2）好学の士として知られ、武蔵国六浦（横浜市金沢区）の称名寺内に私設図書館金沢文庫を設立した。蔵書は仏書が多い。
3）平安末から鎌倉中期に興った仏教で、法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、一遍の時宗、栄西の臨済宗、道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗を指す。背景には政治・社会不安があり、末法の克服を目指した。
4）前述の南都六宗を指す。

3．南北朝・室町初期の闘茶

鎌倉末期から南北朝時代にかけて、茶は九州、畿内、関東で栽培されるようになり、「本茶」といわれた栂尾産を頂点に、宇治や醍醐でも良質の茶がつくられるようになった。

室町幕府３代将軍足利義満（1358～1408）は1386（元中３）年頃、山名氏清（1344～91）に命じ、宇治川畔に森、川下、朝日、祝、奥山、宇文字の六園を開かせた。そして宇治茶には特別の庇護を与えるかわりに、外部に売り出すことを禁じたのである。宇治茶のブランドはこれ以降形成されてゆく。なお安土桃山時代上林家がつくった枇杷を加え、「宇治七名園」と呼ばれているが、現在はほとんど消滅し、朝日、奥山の一部が残るだけである。

さて鎌倉末期以降の喫茶は、栄西の流れを受け継ぐものに加え、貴族や武士の社交の場にも登場するようになった。前述の北条（金沢）実時の孫にあたり、鎌倉時代末期に連署や執権など重職を務めた金沢貞顕（1255～1333）は、叡尊の教え（律宗）の関東における拠点であった称名寺の裏山に茶園を設けるほど喫茶を好んだという。また彼は茶葉や茶道具の調達を依頼する趣旨の書状を多く残している。例えば、『徒然草』の著者吉田兼好の兄倉栖兼雄が「栂尾茶」を金沢氏に取次いでいたことは周知であるし、貞顕の長子で京都に住んでいた真乗院顕助も、京都から鎌倉へしばしば茶を送った。こうした事実は、茶が武士社会に広まっていったことを物語っている。

武士社会における茶の特徴は、唐物茶道具を賞玩しつつ喫茶を行ったことである。円覚寺の塔頭仏日庵の『仏日庵公物目録』（1363書写）には、頂相（禅僧の上半身または坐相を描いた画像）のほか、建盞（天目型茶碗）、絵画、墨蹟、花瓶、香炉などが記載されている。また喫茶の場となったのは「会所」であった。会所は必ずしも茶の湯専用の空間ではなく、和歌や連歌など広く芸能の場として使用されたが、ここには多くの唐物が飾り付けられていた。金沢貞顕も鎌倉の邸宅に会所を持っていたことはよく知られている。

1351（正平６）年成立した絵巻『慕帰絵詞』には、会所での歌会の様子を描いた部分がある。部屋の壁には柿本人麻呂の画像が掛かり、その前には香炉と花瓶、懐紙や短冊を載せる文台が置かれている。さらに僧侶が点茶の準備をする光景や、茶筅や茶器などの茶道具も見られ、「会所の茶」の場面が想像できる。

他方、趣味的な喫茶法として、闘茶が流行するようになったのもこの時期の特徴である。闘茶は茶歌舞伎ともいうが、端的にいえば茶の産地を当て、勝敗を競うゲームである。すなわち、栂尾産を「本茶」、他産地のものを「非茶」として味を識別するもので、通常は十服飲み分けるのであるが、七十服、百服と繰り返されることもあった。そしてときには多額の賭金が動き、ギャンブル的な要素が強かった。1334（建武元）年京都二条河原に貼り出された落書は建武の新政の失敗を鋭く批判・風刺しているが、「此比都ニハヤル物」として「茶香十炷ノ寄合」（４種類の香木を10回炷いて種類を当てる競技）を挙げている。

〈史料８〉佐々木導誉の闘茶会（『太平記』）

又都ニハ佐々木佐渡ノ判官入道々誉ヲ始メトシテ在京

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ノ大名、衆ヲ結ンデ茶ノ会ヲ始メ、日々寄合活計ヲ尽スニ、異国本朝ノ重宝ヲ集メ、百座ノ粧ヲシテ、皆曲盞[1]ノ上ニ豹・虎ノ皮ヲ布キ、思々ノ段子（緞子）金襴ヲ裁キテ、四主頭[2]ノ座ニ列ヲナシテ並居タレバ、只百福荘厳ノ床[3]ノ上ニ、千仏ノ光ヲ双テ坐シ給ヘルニ異ナラズ。異国ノ諸侯ハ遊宴ヲナス時、食膳方丈[4]トテ、座ノ囲四方一丈ニ珍物ヲ備フナレバ、其ニ劣ルベカラズトテ、面五尺ノ折敷ニ十番ノ斎羹[5]・点心[6]百種・五味[7]ノ魚鳥・甘酸苦辛ノ菓子共、色々様々居双タリ。飯後ニ旨酒三献過テ、茶ノ懸物[8]ニ百物、百ノ外ニ又前引ノ置物ヲシケルニ[9]、初度ノ頭人[10]ハ、奥染物[11]各百充六十三人ガ前ニ積ム。

〈解説〉

南北朝の動乱期には、伝統的でオーソドックスなものを否定し、異風なものへの関心が高まった。それを象徴することばが「バサラ」であった。「バサラ」とは物好き・創造性といったニュアンスを含む美意識で、「バサラ大名」の代表が佐々木導誉（1296～1373）であった。導誉は建武の新政では後醍醐天皇に協力し、その後は足利尊氏にも従って、室町幕府創設に貢献した。

導誉に代表される「バサラ大名」たちは、仲間を集めては茶寄合を開き、舶来品（唐物）を持ち寄り、会場を派手に飾って贅沢な宴会を行った。その宴会の中で闘茶も楽しんだのである。

（注）

1）椅子の一種。背もたれと肘掛が円くなっている。
2）主頭は茶会の際の主客を指す。現在建仁寺に伝わっている四頭の茶礼は曲盞に座した客一人一人に抹茶の入った茶碗を配り、供給と呼ばれる僧が湯を注いでまわるのが特徴である。
3）百福＝百幅で、唐物の掛幅が数多く掛かっている様子をいう。
4）膳の前一丈（約3.03m）四方にご馳走を並べること。
5）野菜の羹（熱い吸物）の意と思われる。
6）正食の前に取る簡単な食べ物。茶請けの菓子。
7）五種の味覚、すなわち甘・酸・鹹（しおからい）・苦・辛をいう。
8）懸賞の品。
9）各人の前に懸賞の引出物を出してということ。
10）最初の当番の者はという意味。
11）奥州産の染物の意。

4．侘び茶の成立と発展
―村田珠光・武野紹鷗の時代―

15世紀後半8代将軍足利義政（1436～90）を中心に展開された東山文化は、禅の精神に基づく簡素さと、伝統文化の幽玄・侘びを精神的基調としていた。東山文化を象徴する建築様式が書院造で、押板、違い棚、茶の湯棚など、道具を飾るための棚が設けられた。これらの棚に道具をどのように飾るか、将軍や有力大名の道具飾り（室礼）を担当したのが、能阿弥（1397～1471）、芸阿弥（1431～85）、相阿弥（？～1525）の三阿弥と呼ばれる同朋衆であった。彼らは「会所の茶」を整備する役割を果たした。

唐物荘厳を中心とする書院茶に対し、庶民の間でも次第に喫茶が普及してくる。一服一銭の立売茶である。東寺や祇園社などの門前では、参詣客に安価な茶を飲ませる茶屋が出現する。

以上のような唐物荘厳の道具鑑賞の深化と、喫茶の風習の普及を背景に茶の湯を誕生させたのが村田珠光であり、それを受け継いだのが武野紹鷗であった。

〈史料9〉古市播磨法師宛珠光一紙

古市播磨法師　　殊光

此道、第一わろき（悪き）事は、心のかまん（我慢）かしやう（我執）也[1]、こふ（功）者をばそねみ（猜み）、初心の者をば見くたす（見下す）事、一段勿体無き事[2]共也、こふしや（功者）にハちかつき（近付）て一言をもなけき（嘆き）[3]、又、初心の物をばいかにもそたつ（育つ）べき事[4]也、此道の一大事ハ、和漢之さかい（境）をまきらかす（紛らかす）事[5]、肝要ゝ、ようしん（用心）あるべき事也、又、当時、ひえかるゝ（冷え枯るる）と申して、初心の人体が[6]ひせん（備前）物、しからき（信楽）物などをもちて、人もゆるさぬたけくらむ事[7]、言語道断也、かるゝ（枯るる）と云事ハ、よき道具をもち、其あちわひ（味わい）をよくしりて、心の下地によりてたけくらミて[8]、後までひへ（冷え）やせて（痩せて）こそ面白くあるべき也、又、さハあれ共、一向かなハぬ（叶わぬ）人体ハ[9]、道具にハからかふべからず候也[10]、いか様のてとり（手取）風情にても、なけく（嘆く）所、肝要にて候[11]、ただかまんかしやう（我慢我執）がわるき事にて候、又ハ、かまんなくてもならぬ道也[12]、銘道ニいわく、心の師とハなれ、心を師とせざれ[13]、と古人もいわれし也。

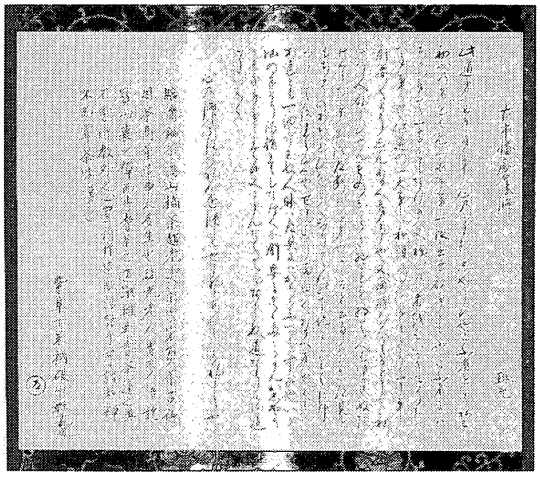

図8　珠光　心の文（文献5）P.164

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

〈解説〉

古市播磨法師（1459～1508）は大和の土豪で興福寺の有力衆徒、かつ、茶の湯の名人でもあった。上記史料は珠光の「草庵茶」の神髄を古市播磨に与えたものである。

さて村田珠光（1423～1502）は、1423（応永30）年、奈良の検校[14]村田杢市の子として生まれ、11歳のとき称名寺（奈良）の法林院に入り出家した。若くして茶を好み、当時流行していた闘茶にふけって寺役も怠ったため、追放された。放浪ののち、大徳寺の一休宗純（1394～1481）から禅を学んで茶禅一味の境地に至り、侘び茶を完成、わが国の茶祖と称される。

珠光は、茶の湯の場所における人間平等、茶会を成立させるために必要な客振り・亭主振りの重要性、酒色の禁止などを説き、それまでの通俗的、遊興的な茶を一新した。さらに茶室と茶道具を改良し、まったく新しい創造を試みた点は注目に値する。すなわちそれまでの書院の広間にかわり、「数寄屋」と呼ぶ草庵の四畳半を真の座敷であるとし、床の掛け物を唐物から名禅の墨蹟を第一としたこと、また茶杓も象牙や銀ではなく竹にするなど、唐様の茶を完全に和風へと改めた。

なお、彼の名言「藁屋に名馬をつなぎたるがよし」とは、侘びたるもの（藁屋）に名馬という優品・名品を組み合わせ、思いがけない対比のなかに美を見いだす珠光の茶の神髄を端的に言い表わしていることばである。

（注）

1）「此道、第一わろき（悪き）事は、心のかまん（我慢）かしやう（我執）也」は「茶の湯の道で一番悪いのは、慢心と我を張ることである」という意味。
2）ここでの「勿体無」は不都合の意。
3）「こふしや（功者）にハちかつき（近付）て一言をもなけき（嘆き）」は「自分が未熟なことを反省して、巧者になりたいと願い」という意味。
なお「なけき」は感激する気持ちを表わす。
4）「いかにもそたつ（育つ）べき事」は「どのようにしたら一人前に育つか心がけること」という意味。
5）「和漢之さかい（境）をまきらかす（紛らかす）事」は「日本的なものと中国的なものの区別を融和し」という意味。唐物が絶対という考え方に対し、和物を評価する意識がみられる。
6）「ひえかるゝ（冷え枯るる）と申して、初心の人体が」は「冷え枯れの境地といって初心者が」ということ。なお「冷え枯れ」とはあっさりとした中に深い趣きのある枯淡の境地をいう。
7）「人もゆるさぬたけくらむ事」は「人々が認めていないのに最高の境地に至った気持ちになること」の意。
8）「心の下地によりてたけくらミて」は「精神的な基盤ができて高い境地に上る」という意味。
9）「一向かなハぬ（叶わぬ）人体ハ」は「よい道具を持ちたいと思ってもその望みが実現しない人は」ということ。
10）「道具にハからかふべからず候也」は「道具にこだわっていてはいけない」という意味。
11）「いか様のてとり（手取）風情にても、なけく（嘆く）所、肝要にて候」は「本格的な茶道具ではない手取り釜のようなものを使ったとしても、よいと感激する気持ちが大切である」ということ。
12）「ただかまんかしやう（我慢我執）がわるき事にて候、又ハ、かまんなくてもならぬ道也」は「慢心し、自分に執着して我を張ることがいけないが、自負もなければやっていけない道である」という意味。
13）「心の師とハなれ、心を師とせざれ」は「自分の心を導く師となっても、心を自分の師としてはいけない」ということ。
14）検校とは、社寺やその行事を総裁する名誉的な僧職のこと。

〈史料10〉大林宗套の茶禅一味の偈（泉州龍山二師遺藁）

大黒庵主一閑紹鷗居士の肖像（武野新五郎源仲材、泉南の人なり）

曾て弥陀無碍[1]の因を結び、宗門更に活機[2]輪を転ず。茶味の禅味と同じきを料知し、松風を吸い尽くして意未だ塵[3]ならず。

〈解説〉

武野紹鷗（1504～55）の父武田信久は若狭守護大名武田氏の後裔で、諸国遍歴ののち泉州堺に定着、武野と姓を改めた。三好氏の援助を得て武具に必要な皮革業を営み産をなした。

図9　武野紹鷗の碑

さて紹鷗は若い頃より歌道を志し、24歳の時に上洛、当代随一の古典学者三条西実隆（1455～1537）から歌道の指導を受けた。また、歌道を研究するかたわら茶の湯を学んでいたが、実隆から歌道の極意ともいうべき定家の歌論書『詠歌大概』の序の講義を聞き、茶道の極意を悟ったという。

31歳のときに堺に帰り、剃髪して紹鷗と号した。その後大林宗套（1480～1568）について禅を深くきわめた。紹鷗は、珠光が理想とした侘び茶を完成させた茶人であるが、足らざることに満足し、慎み深く行動することを説いた。そのため、貴族趣味の書院茶をさけ、藁屋根の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

四畳半に炉を切って茶室とし、唐物の茶器のかわりに信楽、瀬戸などの日常雑器のなかから茶道具を選んだ。また、竹の、蓋置、釣瓶水指、曲物建水なども使用している。

彼は茶の湯は、空間、道具より心の持ち方が重要であると考え、それを自ら実践した。さらに従来遊興や儀礼のひとつであった茶の湯に侘びの精神を吹き込み、「冷え枯れ」という連歌の美学を理想としたことから、茶道中興の祖といわれる。また紹鷗は、定家の有名な歌「見渡せば　花も紅葉も　なかりけり　浦のとまやの　秋の夕暮」(『新古今集』) のなかに、草庵の侘び茶の理想を見いだしたのであった。つまり、花や紅葉を十分眺めつくしてはじめて、一切の煩悩を離れた無一物の世界（＝苫屋の寂びきった風景）が展開するのである。

上記史料は紹鷗が茶禅一味の思想に達したことを示すものである[1]、この禅の精神は紹鷗の道具選びに通じた。

ここで上述の大林宗套と関係深い南宗寺について述べておきたい。南宗寺は管領細川氏の家臣三好長慶（1522～64）が建立し、1557（弘治３）年、大徳寺第90世大林宗套を開山として落慶した。大林宗套は臨済宗大徳寺派の名僧で、三好長慶だけでなく、武野紹鷗や千利休にも大きな影響を与え、堺の人々の精神的支柱としての役割を果たした。

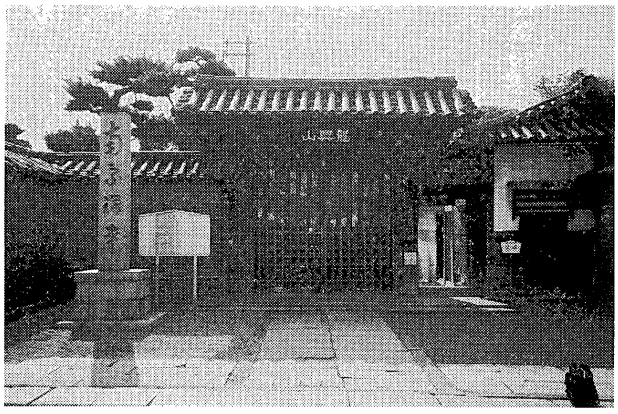

図10　南宗寺

16世紀後半、南宗寺は堺の発展とともに栄えた。禅や茶道を通じ、自治都市堺における文化人のサロン的役割を荷い、茶会も頻繁に催されて、多くの人々が集まった。

その後、大坂夏の陣でことごとく灰燼に帰したが、1617（元和３）年、沢庵和尚により現在地に再建された。1945（昭和20）年の堺大空襲により、方丈や茶室実相庵などを焼失したが、後に再建され現在に至っている。

境内には、国の名勝指定枯山水の庭園をはじめ、国指定重要文化財の山門（甘露門）、唐門、仏殿があり、その他にも、千家一門の供養塔、武野紹鷗の碑、三好家一門の墓、坐雲亭、茶室実相庵などがある。

（注）

1）とらわれがなく自由自在のこと。

2）活機とは禅宗の思想で、俗世を離れながらも人情の機微に通じるという意味。

3）ここでの塵は俗世を指す。

5．信長・秀吉の時代

15世紀後半頃から堺の商人は日明貿易に積極的に関与し、貿易で資本を蓄積した豪商たちが自治組織をつくって市政を運営するようになった。堺はまた、自治組織を戦国大名の抗争から守るため、集落を堀（濠）で囲んだ環濠都市であった。なおこの環濠は1586（天正14）年、秀吉によって埋められるが、この出来事は堺の独立が奪われ、豊臣政権下に組み込まれたことを象徴するものであった。

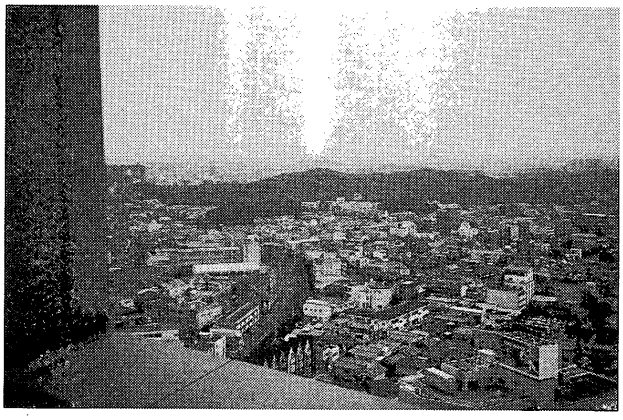

図11　堺市全景

さて、武野紹鷗によってひとつの芸能としての体裁を整えた茶の湯は、忙しく危険な日々を過ごす町衆たちの非日常の遊びとして憩いの場を与えた。彼らは茶の湯の世界を「市中の山居」と語った。生活の場である市中を離れず、一時世俗を忘れ、山居の姿をとるところに町衆の茶の湯があった。

町衆の茶の湯は天文年間（1532～55）に開花し、この頃から茶会記が登場するようになった。茶会記とは茶会の場所や出席者、用いられた茶道具、食事に関する記録で、奈良の塗屋松屋源三郎家の『松屋会記』、堺の豪商天王寺屋（津田家）の『天王寺屋会記』、同じく堺の豪商今井家の『今井宗久茶湯書抜』などが著名である。

堺の代表的な町衆は今井宗久（1520～93）、津田宗及（？～1591）、千利休（1522～91）であり、名物道具を持ち、茶の湯の達人と呼ばれた。彼らは信長・秀吉のもとで茶頭として仕えた。

織田信長（1534～82）は、天下統一の過程で茶の湯と接するようになった。1568（永禄11）年、信長は足利義

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

昭を奉じて入京し、天下統一への第一歩を踏み出した。その際堺に軍資金の拠出を命じるが、会合衆を中心に防備を固め、抵抗を試みた。しかし抵抗も長続きせず、信長は翌年堺を直轄領として、畿内の高い経済力を自分のもとに集中させた。天下人を志した信長は権威と権力の誇示のため、「名物狩り」（名物茶道具の収集）を行ったのである。これらは恩賞にも使われ、茶の湯が政治的にコントロールされるようになった。（茶の湯御政道）信長の「名物狩り」は自らの審美眼によるものではなく、すでに評価の固まったものを収集するという特徴を持っていた。

豊臣秀吉（1537～98）が茶の湯に関わるようになったのは、1578（天正６）年頃からである。秀吉は利休の茶を理解し、茶の湯への思いは信長以上に深かったといわれている。いまひとつ注目すべきは、豪放な茶の湯を目論んだことであり、1585（天正13）年の京都大徳寺における大茶の湯、1587（天正15）年の北野大茶の湯がその典型といえよう。

一方大徳寺大茶の湯と同年、秀吉は正親町（おおぎまち）天皇の御所で天皇や親王を招いた茶会を開いている。天皇が公式に茶の湯の席に入ったのは、これがはじめてであった。これまで商人や武将の間でしか行われていなかった茶の湯が、公家の世界に受け入れられた意義は大きかった。

さらに大坂城に黄金の茶室をつくらせたことを考え合わせると、秀吉の茶会は自らの権力を誇示する目的と人々に天下泰平を印象づける意図があったといえる。

〈史料11〉市中の山居（『日本教会史』）

数寄と呼ばれるこの新しい茶の湯の様式は、有名で富裕な堺の都市にはじまった。その都市は日本最大の市場で、最も商取引の盛んな土地であり、きわめて強力なので、以前には、信長および太閤までの時代には、日本の宮都と同じように、長年の間、外部からの支配を認めない国家のように統治されていて、そこにはすこぶる富裕で生活に不自由しない市民やきわめて高貴な人たちが住んでいる。彼らは相次ぐ戦乱のために、各地からそこに避難して来ていた。その都市で資産を有している者は、大がかりに茶の湯に傾倒していた。また日本国中はもとより、さらに国外にまで及んでいた商取引によって、東山殿のものは別として、その都市には茶の湯の最高の道具があった。また、この地にあった茶の湯が市民の間で引き続いて行われていたので、そこにはこの芸道に最もすぐれた人々が出た。その人たちは、茶の湯のあまり重要でない点をいくらか改めて、現在行われている数寄を整備していった。たとえば、場所が狭いためにやむを得ず当初のものより小さい形の小家を造るようになったが、それは、この都市がまったく爽やかさのない干からびた海浜の一平原に位置しており、さらにいえば、西側は荒い海岸に囲まれた砂原になっていて、周辺には泉や森の爽やかさもなく、また都の都市に見られるような、数寄にふさわしい人里離れて懐旧の思いにふける場所もないからである。

（中略）

この都市にあるこれらの狭い小家では、たがいに茶を招待し合い、そうすることによって、この都市がその周辺に欠いていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では、彼らはこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた。というのは、都市そのものの中に隠退所を見出して、楽しんでいたからであって、そのことを彼らの言葉で、市中の山居といっていた。それは街辻の中に見出された隠退の閑居という意味である。

〈解説〉

『日本教会史』はイエズス会の通辞ジョアン・ロドリゲスが日本におけるキリシタン布教資料として、日本人の生活・風俗をまとめたものである。市中の山居は俗塵と非日常を対比させた美意識である。

〈史料12〉北野大茶の湯

（天正十五年）七月廿八日
於京都御高札之面
定御茶湯之事

一　北野の森におひて、十月儀ハ朔日（ついたち）より十日の間に、天気次第、大茶湯御沙汰なさるるに付、御名物共残らずそろへなされ、執心之者ニ拝見せらるべくために御催なられ候事。

一　茶湯に執心の者、又、若党・町人・百姓以下によらず、一釜、一つるへ、一のミ物、茶こかしにても苦しからず候条、ひつさげ来、仕かくべき事。

一　座敷之儀ハ松原にて候条、たたミ二畳、ただし、わび者ハとぢつけにても、いなはきにても、くるしかるまじき事。

一　日本之儀ハ申すに及ばず、から国の者までも、数寄心がけ之在る者ハ罷り出るべき事。付、所ノ儀ハ次第不同たるべき事。

一　遠国の者まで見セらるるべきため、十月朔日まで日限御延ならる事。

一　此の如く仰せ出され候儀は、わび者を不便ニ思し召されての儀ニ候条、此度、罷り出ざる者ハ、向後はこがしをもたて候事、無用との御異見候、出ざる者の所へ参候者も同前、ぬるものたるべき事。

一　わび者においてハ、誰々遠国によらず、御手前にて御茶下さるべき旨、仰せ出され候事。

〈解説〉

北野大茶会は、1587（天正15）年10月1日、豊臣秀吉

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

が京都北野神社の境内と松原において開催した大茶会である。秀吉はそれまでにもしばしば茶会を開いたが、これはとくに盛大で、歴史上もっとも有名な茶会である。

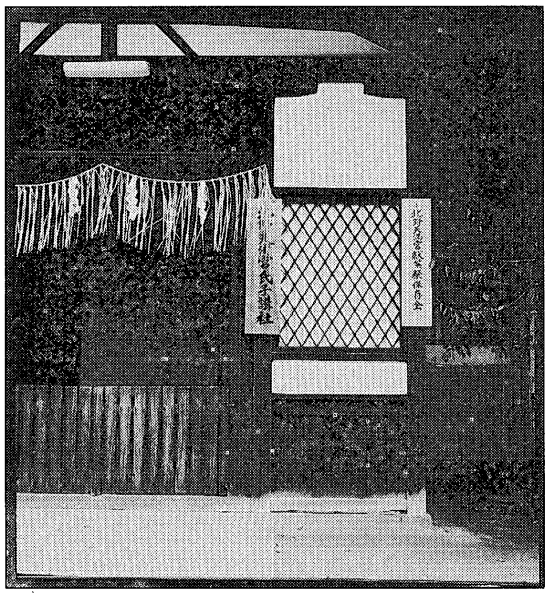

図12　北野神社

この1587（天正15）年という年は、秀吉の天下統一事業がほぼ完成しつつあった時期といえる。その過程を簡単にふりかえると、まず1582（天正10）年、山崎の合戦で明智光秀を討ち、翌年には信長の重臣柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破って実質的に信長の後継者としての地位を確立した。その後1584（天正12）年織田信雄（信長の次男）・徳川家康との戦い（小牧・長久手の戦い）での講和をはさみ、1585（天正13）年には長宗我部元親を降伏させて四国平定に成功した。同年秀吉は朝廷から関白に任じられ、翌年太政大臣となって豊臣の姓を与えられた。秀吉は関白就任後九州で惣無事令を出し、戦国大名に対して停戦と領地の確定を秀吉に任せることを強制した。そして1586（天正14）年、その領域を関東・東北にまで拡大したが、島津氏はこれに応じなかったため、1587（天正15）年大軍を派遣して島津義久を討伐した。（九州平定）

以上のように北野大茶会は、秀吉の全国支配の基礎が固まった直後に行われることになり、８月より洛中をはじめ畿内一円に高札を立てて参加者を募った。

高札の全文は七箇条にわかれているが、身分上下の別なく、数寄者であれば手持ちの道具を持参し参加せよ、茶のない者は「こがし」でもよい、と呼びかけている。ちなみに「こがし」とは、米や麦を焼いて焦がしたもので、湯に溶かして飲むもののようだ。遠く博多の茶人神谷宗湛をはじめ全国から人が集まり、茶屋1,500ほどが建ち並んだ。秀吉自身が茶を点てた相手だけでも、800人をこえたという。当日、北野神社の拝殿は３つに仕切られ、その中央には黄金の茶室が置かれ、秀吉自慢の名物も陳列された。一般の茶席は道の両側に、軒を連ねてギッシリと並んだようだ。千利休・津田宗及・今井宗久、さらには秀吉自身が亭主となり、参会者に茶をふるまった。

第六条では今回参加しない者はたとえこがしであっても、茶の湯めいたことはしてはならないと述べている。禁制の実効性がうすいのは明らかであるが、茶人としての資格はこの大茶湯でのみ確認され、それ以外は認めないというのである。茶の湯においても自分が天下人でありたいという秀吉の思いのあらわれである。

6．千利休による茶の湯の完成

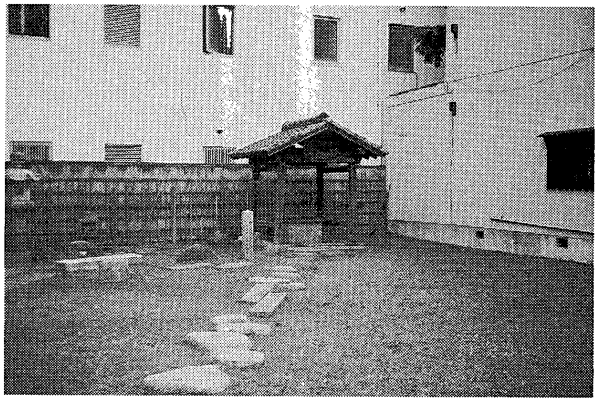

図13　千利休屋敷跡

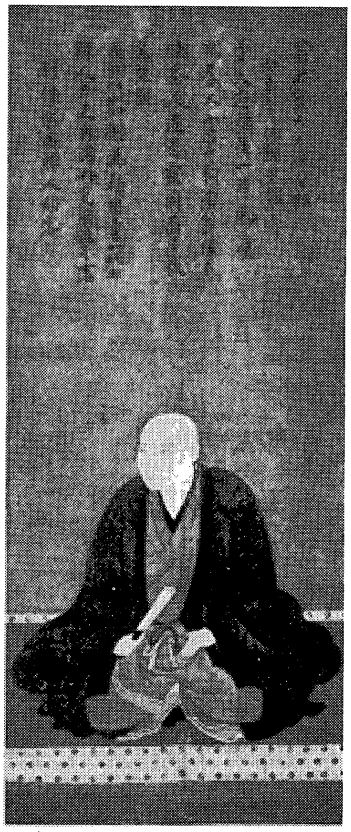

図14　千利休像（文献５）P.176

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

千利休は、堺の町衆の間で発達してきた侘び茶の伝統を継承しつつも、茶室、道具、点前、懐石、精神性など、茶の湯を構成する様々な要素において創意工夫を重ね、今日の茶道の基礎を築いた。

奈良春日大社の侘び茶人久保利世（1571～1640）の随筆『長闇堂記』に、利休が「茶の湯とはただ湯をわかして茶を点てて呑むばかりなりを本と知るべし」と言ったと書かれている。ここからも明らかなように、利休は茶の湯を特別視せず、その日常性を強調した。しかし一方で、非日常的な虚構の空間＝茶室における作法（ふるまい）の中に、亭主と客が互いに尊敬しあい、つつしみあう「和敬清寂」の精神を徹底して追求した。ようするに、生活と密着した茶＝日常性と、芸術としての茶＝虚構性という矛盾した要素の並存に、利休の茶の湯の本質があるといえるだろう。

〈史料13〉利休の侘び（『南方録』）

紹鷗ワビ茶ノ湯ノ心ハ、新古今集ノ中、定家朝臣ノ歌ニ、

見ワタセハ　花モ紅葉モ　ナカリケリ　浦ノトマヤノ秋ノタグレ

コノ歌の心ニテこそあれ申されしと也、花紅葉ハ、則書院の結構にたとへたり、其花もみぢをつくづくとながめ来りて見れば、無一物ノ境界浦のトマヤ也、花紅葉ヲシラヌ人ノ、初ヨリトマ屋ニハスマレヌゾ、ナガメナガメテコソ、トマヤノサビスマシタル所ハ見立タレ、コレ茶ノ本心也トイハレシ也、又宗易、今一首見出シタリトテ、常ニ二首ヲ書付、信ゼラレシ也、同集家隆ノ歌ニ、

花をのミ　待らん人に　山ざとの　雪間の草の　春を見せばや

これ又相加へて得心すべし、世上の人々そこの山・かしこの森の花が、いついつさくべきかと、あけ暮外にもとめて、かの花紅葉も我心にある事をしらず、只目に見ゆる色バかりを楽む也、山里ハ浦ノトマヤモ同前ノサビタ住居也、去年一トセノ花モ紅葉モ、コトゴトク雪が埋ミ尽シテ、何モナキ山里ニ成テ、サビスマシタマデハ浦ノトマヤ同意也、サテ又カノ無一物ノ所ヨリ、ヲノヅカラ感ヲモヨホスヤウナル所作ガ、天然トハヅレハヅレニアルハ、ウズミ尽シタル雪ノ、春ニ成テ陽気ヲムカヘ、雪間ノトコロドコロニ、イカニモ青ヤカナル草ガ、ホツホツト二葉・三葉モヘ出タルゴトク、力ヲ加ヘズニ真ナル所ノアル道理ニトラレシ也、歌道の心ハ子細もあるべけれども、この両首ハ、紹鷗・利休茶の道にとり用ひらるる心入を聞覚候てしるしをく事也、かやうに道に心ざしふかく、さまざまの上にて得道ありし事、愚僧等が及ぶべきにあらず、まことに尊ふべくありがたき道人、茶ノ道カトヲモヘバ則、祖師仏ノ悟道也、殊勝殊勝。

〈解説〉

『南方録』は桃山時代の禅僧南坊宗啓（？～1624）が著わし、黒田藩家老立花実山（1655～1708）が編集したといわれている。利休の茶の湯を伝える重要な秘伝書のひとつである。上記史料は紹鷗と利休の侘び茶の心を論じたものである。

ここで千利休の生涯をふりかえっておこう。千利休は1522（大永２）年、堺に生まれた。17歳で茶の湯を北向道陳（きたむきどうちん）に学び、19歳で武野紹鷗に入門した。1570（元亀元）年、信長に初めて謁し、1575（天正３）年、堺の町衆、今井宗久、津田宗及らの推薦によって茶頭（さどう）に加わった。1582（天正10）年、信長は本能寺の変で殺害され、秀吉の時代になるが、利休の地位は変わらなかった。利休の功績は、茶道の理論的完成を成し遂げただけでなく、茶室から庭、道具、作法に至るまで、茶道を精神文化の水準にまで高めたことにあった。

利休の改革の骨子は次のとおりである。

① 座敷は珠光の頃から草庵の茶室として生まれた数寄屋を改造し、珠光の四畳半の真、紹鷗の四畳半の行に対する草の四畳半をつくり出した。真、行、草とは書道でいう楷書、行書、草書に対応した美意識である。利休は座敷のなかに菰天井、丸太柱、塗壁、下地窓、躙口（にじりぐち）などをしつらえた。それまで座敷へ入るには身分の上下で違っていたが、等しく躙口からとしたのは利休の独創である。また待庵にみられる二畳敷という極小空間を造りあげ、その後の和風住宅に大きな影響を与えた構成と意匠を創造した。

② 露地と称する茶庭については、跳木戸のある二重露地、中くぐりを設けた三重露地、手水鉢（ちょうずばち）、飛び石、石灯篭、腰垣、腰掛待合、石橋、雪隠（せっちん）などの工夫を行った。

③ 会席料理はこれまでの二汁三菜を重いものとし、一汁一菜を通常とした。これは遊興性の強い茶会の排除にもつながった。

④ 長次郎を指導して楽焼きの茶碗をつくりだすなど、独創的な試みを行った。従来の名物中心の茶道具に対し、新作あるいは無名の道具を自らの審美眼によって積極的に取り上げた。

⑤ 濃茶（こいちゃ）を真とした従来の考え方を否定し、薄茶を理想とした。（濃茶、薄茶の違いは使用する抹茶の量で、濃茶は練る、薄茶は点てるといった。）

おわりに

利休は秀吉のもとで隠然たる権力を持っていたが、北野大茶会をピークとして、両者の関係は悪化し、1591（天正19）年、利休の切腹で決着した。その直接的原因は、大徳寺山門に自分の木像を安置させたことと、茶道

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

具の目利きと売買が私利をはかる不正なものであったからだといわれている。しかしより深く考えると、日本全国を統一し、身分制度の確立を急いだ秀吉にとって、既成の権力に迎合せず、己の茶の湯に忠実に改革を試みた利休の存在が、うとましく感じられるようになったのであろう。山上宗二、津田宗及、今井宗久といった茶人たちも、利休自刃の前後に相次いで失脚し、秀吉の周辺から姿を消していった。利休の死は、戦国の下剋上が終わりを告げ、中央集権的な新しい近世権力が出現したことを意味している。

利休の死後茶道は武家社会に広がり、大名茶人の古田織部（1543～1615）やその弟子の小堀遠州（1579～1647）らが誕生した。彼らは利休の精神を受け継ぎつつも、利休とは異なる独自の茶道観も持っていたと言われている。

一方千利休の系譜に目を向けると、孫の宗旦（1578～1658）が３人の子供たちに自分の茶を継がせた。代々の不審庵を三男宗左が引き継いで表千家とし、自らは四男宗室とともに、今日庵を建てて裏千家の祖となった。さらに次男宗守は官休庵を建て、武者小路千家が成立したのである。

最後に利休の茶道精神を最も的確に言い表した『利休七則』を紹介しておこう。すなわちそれは「茶は服のよきように点て」（茶は時と場所に応じて客の気持ちを察して点て）、「炭は湯の沸くように置き」（最良の炭の置き方をして、すなわち準備をしっかりして）、「花は野にあるように」（花は咲いていた状態が感じられるように生け）、「夏は涼しく冬暖かに」（夏には涼を冬には暖を感じさせるよう、客を想ってもてなし）、「刻限は早めに」（焦らずゆとりを持って）、「降らずとも傘の用意」（備えを怠らず）、「相客に心せよ」（同席した客に気配りをせよ）というものである。

敗戦の廃墟の中から立ち上がった日本は、今や世界屈指の経済大国となり、「物質的豊かさ」を手に入れることに成功した。しかし反面、相手を思いやる気持ちや人間的連帯感が薄れてきたことを懸念する声が多く聞かれ、社会に様々なひずみが出始めている。また平成不況の長期化で効率性・経済性を重視するあまり、我々は心のゆとりを失いつつあることも事実である。

量的発展を終えた21世紀日本の課題は、誰もが精神的満足感を実感し、心豊かで質の高い生活を隅々にまで浸透させることである。茶道の精神は、感受性や創造性を育み、真に活力のある社会を実現するための一助となるにちがいない。

【参考文献一覧】

1）梅棹忠夫監修、守屋毅編集『茶の文化　―その総合的研究―』（第１部、第２部）淡交社、1981年。
2）小川後楽『煎茶への招待』日本放送出版協会、1998年。
3）小川後楽『茶の文化史』（人間講座テキスト）日本放送出版協会、2002年。
4）神奈川県立金沢文庫『鎌倉時代の茶』（テーマ展図録）、1998年。
5）京都国立博物館編『日本人と茶』（特別展覧会図録）、2002年。
6）熊倉功夫『茶の湯の歴史』朝日新聞社、1990年。
7）熊倉功夫他『史料による茶の湯の歴史・上』主婦の友社、1994年。
8）熊倉功夫『茶の湯文化史』（人間大学テキスト）日本放送出版協会、1995年。
9）谷端昭夫『チャート茶道史』淡交社、1995年。
10）谷端昭夫『茶の湯の文化史　―近世の茶人たち―』吉川弘文館、1999年。
11）日本茶業中央会監修『日本のお茶』（全３巻）、1988年。
12）渕之上弘子『日本茶百味百題』柴田書店、2001年。
13）村井康彦『茶の文化史』岩波書店、1979年。
14）吉村亨『宇治茶の文化史』宇治市歴史資料館、1993年。

NII-Electronic Library Service